

主 題：神の栄光のために3**聖書箇所：ローマ人への手紙 15章7－13節**

パウロは14章1節から、信仰の強い人も、また、信仰の強くない人も「互いに受け入れ合うように」と教えて来ました。そして、今日私たちが見て行く15章7節から「互いに受け入れ合っていく」ことについて、主イエス・キリストと私たち信仰者との関係を引き合いに出して説明をしようとしています。パウロは「主イエス・キリストが受け入れてくださったように、あなたたちも互いに受け入れ合いなさい」と言います。主イエス・キリストのみわざに倣って行ないなさいとパウロは命じるのです。

☆互いに受け入れ合っていくために**A. キリストのみわざ 7－9a節****1. 一方的な神の意志**

私たちは主イエス・キリストのなさったどのようなみわざを模範にするべきか、そのことが7節に記されています。ひと言で言うなら「救い」のことです。15：7「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」、神が私たちを受け入れてくださったと、パウロはそのことを教えるのですが、この神のみわざは「一方的な神のご意志」だと言います。何か私たちが神の前に喜ばれることをしたから、神はその報いとして救いをなしてくださったのではなくて、これは一方的な神からの恵みである、神のご意志だということを7節で教えているのです。「キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださった」、そのようにあなたも兄弟姉妹を受け入れなさいと言います。この「受け入れなさい」というのは、神が主イエス・キリストが交わりのうちに、仲間のうちに入れてくださった、だから、あなたたちもそのようになすべきだということです。すべては主のご意志に基づくものでした。私たちはこのような祝福をいただくような者でないことは、私たち自身、重々知っています。どこを見ても私たちはこのような祝福に与る者でないことはよく分かっています。しかし、現実を見た時に、神はあなたや私をこの救いの中に一方的に招いてくださったのです。私たちがこうして救われたことを喜んでいるのは、神があなたを救おうとお決めになり救いへと招いてくださったからです。すべては神のみわざです。

皆さんがよくご存じのヨハネの福音書15：16にはイエスが「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」と言われたことが記されています。そのことを教えたパウロは、イエスがあなたを一方的に救いへと選んでくださったその目的について、この7節で続けて教えています。

2. その目的

なぜ、あなたがこのような祝福をいただいたのか、なぜ、神があなたを救ってくださったのかその目的です。「キリストが神の栄光のために」と記されています。パウロが言っていることは「あなたは神の栄光のために救われた者だ」ということです。それがあなたが救われた目的なのです。だから、その目的に沿って私たちは生きるのです。「私たち信仰者は何のために生きていますか？」と聞くと、みなは「神の栄光のためです」と答えます。なぜ、そのように言うのでしょうか？みことばが私たちにそのことを教えているからです。私たちがこの救いに与ったのは神の栄光のためであると。間違いなく、皆さんもご存じだと思います。「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」と、ルカの福音書15：10で教えています。想像できますか？一人の罪人がその罪を悔い改めて、主によって備えられたこの救いを心から受け入れるならば、天使たちの間に大きな喜びがわき上がるということです。罪人の一人が救いに与ったと彼らが喜ぶのです。

主はヨハネ15：8でもこのように言っておられます。「あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。」と、神の栄光のために救われたあなたが神の栄光のために歩んで行くこと、それが神の望んでおられることだということは、みことばが明確に教えています。イザヤはこのように言っています。イザヤ書43：7「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」と。確かに、イスラエルはこのようにして神が選ばれたと言います。でも、私たちも同じです。救われた者たちは、今みことばを見て来たように、神の栄光のために救われ、神の栄光を現わすために今日を与えられているということです。私たちが何度も見て来たように、神の栄光のために救われた私たちがどのようにして日々神の栄

光を現わして行くのか？主のみこころに従って生きていくことです。

イエスはこのように言っておられます。ヨハネ 17：4「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上でああなたの栄光を現わしました。」と。主は「わたしはこの地上にあって、この日々の生活においてあなたの栄光を現わして来ました。」と言われたのです。どのようにして現わしたのですか？「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、」と言います。言い方を変えると、「わたしはあなたのみこころを行なってきた。」ということです。最高の模範である主がそのように歩まれたのです。なぜ、最高の模範なのですか？彼はすべてにおいて父なる神の栄光を現わしたからです。そのために救われた私たちは、神の栄光を現わすために私たちも主が歩まれたのと同じように、主のみこころに従って生きて行くことです。神がくださったみことば、聖書の教えに従って生きていくことです。この模範に倣うようにと主が一方的に働き、そして、神の栄光のために受け入れてくださったのだから、あなたたちも自分の意志をもってすべての人を受け入れるようにと。それらを通して神の栄光が現われるから、そのことを望みながらこのように為していきなさい、互いに受け入れ合うようにとパウロは教えるのです。

このことを話した後、パウロは今度は受け入れることに関しての実践を教えています。

3. その実践

1) 「受け入れる」とは？

先ほどから見てるように、7節には「受け入れてくださった」、「受け入れなさい」ということばが出て来ます。新約聖書の中には12回出て来ることばです。その中でピレモン書17節にはこのことばは次のように訳されています。「ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。」と。このように「迎える」ということです。「温かく迎える」ということです。そのことを主は私たちに、この教会にあって、この群れにあって、また、周りの兄弟姉妹たちに対して為しなさいと言うのです。主が受け入れてくださったように、主が私たちをその交わりに招いてくださったように、親しい交わりに私たちを歓迎してくれたように、私たちもそのように行ないなさいと。

・国籍、民族、身分

この神の命令を見た時に、そこには国籍も民族も身分も全く関係のないことを知らされます。悲しいことに、そのようなことが問題になっているところもあります。私も聞いたことがあります、国籍が違うとか、人々が差別する所の出身者だからとか、そのようなことで結婚が大変難しい問題になってしまったということ、皆さんもそのようなことをお聞きになったことがあるかと思います。非常に悲しいことです。世の中でそのようなことが起こることは仕方ないです。しかし、教会の中であって、神によって救われた者たちが集まっている所であって、世がなすそのようなことを私たちがなすなら、それは悲しいことです。なぜなら、パウロはそのような差別は主への罪であると言います。そして警告を与えます。差別をする時に私たちはその人よりも自分を高く上げているからです。彼らよりも自らを優れた者にしているからです。そのようなプライドが問題なのです。

ヤコブはヤコブ書2章でこのような差別に対して厳しく戒めをなしています。状況を描いてみてください。教会の中に非常に裕福な人とそうでない人が入って来ました。教会は裕福な人に対して非常な歓迎をし、そうでない人を非常に愛なく扱うのです。そのようなことに対してヤコブはこのように教えています。2：4「あなたがたは、自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったのではありませんか。」と、8－10節「もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のよう愛せよ。」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行ないはりっぱです。：9 しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。：10 律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」。神がこのようにご自身の一方的な愛をもって救いへと招いてくださった者たちが集まる場所、そこは特別な所であるはずですが。キリストが受け入れてくださったように、互いに受け入れ合う、そのような場所であるはずですが。

教会にはいろんな国籍の人たちが集まり、いろんな所からいろんな背景を持った人々が集まって来て、ともに同じ主を崇める場所となっています。神は教会をこのように定められました。教会があるべき姿をとることによって確実なことは、神が喜んでくださるし、また同時に、神がそのような教会を用いてくださるのです。私たちが望むことは、ここにもっと様々な国籍の人たちが集まることです。そして、私たちが心をつにして、私たちを救ってくださった主を崇めることです。「互いに受け入れ合いなさい」とパウロは言いました。

・体に不自由を覚えている人たち

もう1つ、私たちの周りには体に不自由を覚えている方々がいます。私たちはそのような皆さんを心

から歓迎すべきです。敢えて「障害者」とは言いません。なぜなら、だれが障害者なのかよく分からないからです。思いませんか？ろう者の皆さんと付き合い始めて思ったことは、耳が聞こえないことはどれ程感謝なことかということです。なぜなら、聞こえることによって聞かなくてもいいことを聞いてしまいます。また、新幹線ではプラットホームの人と電車の中の人とは会話できません。声が届きません。ろう者は便利で、どこでも自由に話ができます。ろう者の集まりに行ったことがありますか？「ちょっとうるさいから静かにして…」という必要はないのです。みんな自由に話しをしています。何となく聞こえている私たちが普通で、そうでない人が障害者であるというのは傲慢だったと思いました。

神はすべてのものを完全にお造りになりました。家庭にあって、例えば、耳が遠くなったおじいちゃんがいたら「おじいちゃんとしゃべっていたら疲れるからもうみんなの交わりに出て来ないで」などとは決して言いません。目が悪いおばあちゃんがいたら「おばあちゃん、目が悪いからいっしょに入らないで」なんて私たちは言いません。家族としてともに交わります。ここにはろう者の皆さんもいらっしゃるのですが、確かに、文化が違う、ことばが違うということがあるでしょう。でも、私たちはそれを越えて神の家族として一つになって神を崇めることができます。ある人々は言います。「文化が違うから、礼拝をするにしても分けた方が良い。」と。しかし、私たちは「いいえ、家族だからいっしょにやろう。」と言います。それが教会です。そこには先程から見て来たように国籍も身分も関係ありません。みなキリストにあって一つです。肉体的な不自由さを感じている人、感じていない人、みんな家族です。

キリストが受け入れてくださったように、私たちも互いに受け入れ合って行きなさいと、なぜ、それが大切なのでしょうか？それは皆さん、私たちはこの世に対してあるメッセージを発しているからです。「キリストによって私たちは主なる神の家族の一員とされた」というメッセージです。言い方を変えると、主が愛しておられる兄弟姉妹を愛することによって、私たちを生まれ変わらせてくださった主なる神をこの世の人々に紹介するという働きです。かつてはいろんな偏見を持っていたし、いろんな差別の心を持っていたけれども、私たちはこの主によって生まれ変わって、そして、ともにキリストを愛する者として、キリストを崇める者としてこのように家族の一員として歩むことができる。それがクリスチャンです。そのように何の偏見もなく愛し合って行く人たち、まさに、それはキリストによって救われたことを喜んでいる者、また、それを経験した者たちであることは間違いありません。

ジョン・マッカーサー先生はこのようなことを言います。「キリストが我々を受け入れてくださったように互いに受け入れることは、神を敬う者の確実な特徴である。そして、受け入れることができないことは、同様に、肉的な者の確かな特徴である。愛とあわれみによって互いに受け入れることをしないことは、我々を受け入れてくださった救い主を傷つけることである。軋轢を生じ、気短で論争好き、批判的な会衆はこの世に対してキリストの教会を批判し、また、彼らの救いに関する唯一の希望であるお方を拒む理由を与えている。」と。ぜひ、考えてみてください。教会の中であって、もしあなたが不和を生じることや、短気であったり、論争好きであったり、常にだれかのことを批判する、そのような歩みをしているならどうでしょう？本来なら、私たちはこの世の人々をキリストに近づける働きをする者です。本来なら、この世の人たちが「あなたの信じている神ってどんな神なのか？」とそれを知りたくてその神のもとに引き寄せられて行く、そのような働きをするのが私たちの責任です。しかし、もし私たちがそれに反することをするなら、人々を近づけるどころか人々をこのすばらしい神から遠のけてしまうことになります。そんなことをしてはならないのです。そんな信仰者になってはならないのです。みことばが私たちに教えるのは、イエスがあなたを受け入れてくださったように「互いに受け入れなさい」です。どうぞ、一人ひとりの信仰者の皆さん、イエスがあなたを受け入れてくださったそのすばらしい救いを思い出してください。どんなに大きな愛をもって、どんなに大きな犠牲をもってあなたを受け入れてくださったのか…。祈ることです。「主よ、どうぞあなたがしてくださったと同じように、私の周りの兄弟姉妹を受け入れることができるように。あなたが愛してくださったのと同じように、周りの兄弟姉妹を愛することができるように私を助けてください。愛のない者です。愛の乏しい者です。許すことのなかなかできない者です。助けてください。あなたが喜ばれることをしたいから。」と、そうしてあなたが変えられて行くなら神が喜んでくださるのです。

2) 「受け入れる」ことに関する注意事項

「受け入れる」ことに関しての注意事項があります。というのは、こうして私たちが互いに「受け入れ合いなさい」と言われた時にすぐに考えてしまうことは、では、無条件に何でも受け入れていいのかということです。みことばは私たちにそうではないことを教えています。主が私たちを受け入れてくださった、私たちを救いへと導いてくださった、その目的は神の栄光のためであると見て来ました。ですから、私たちも互いを受け入れ合って行く時に、そこには間違いなく条件があります。それは、そのこ

とによって神の栄光が現わされて行くことです。そのことによって神が喜んでくださるかどうかが、そのことを考えながら私たちは受け入れるのです。クリスチャンだということでは何でも受け入れていいということでは決してないのです。それによって神がお喜びになるかどうかです。すなわち、主のみことばである聖書の教えに沿ったものかどうかがかぎです。

例を上げてみましょう。確かに、私たちの周りにはいろいろなクリスチャンがいます。皆さんもいろいろなクリスチャンたちとお付き合いになっているでしょう。

(1) **協調できるもの**：聖書がダメだと明確に教えていないことに関しては問題ありません。例えば、残念ながら、いろいろなことでクリスチャンたちも仲違いしている場合があります。よく聞いてみると、その問題は音楽のことであったりします。教会の中でどのような音楽がふさわしいのか、いろいろな意見があります。いろいろな好みの人が集まっています。「互いに受け入れ合いなさい」と言われます。その音楽は自分にとって余り好きでない、でも、それを好きな人がいるのです。受け入れなさいと言います。洋服でもいろんな考えがあるでしょう。聖書が教えることは、それが異性に対して性的な誘惑をもたらすようなものでないかどうかを気を付けることです。しかし、それ以外に関しては、それぞれが何が神の前にふさわしいのかどうかを考えることです。

また、儀式についてはどうでしょう？教会によって例えばいろいろな聖餐式のもち方があります。月に1回、毎週、半年に1回の所もあります。また、教会によっては実際のぶどう酒を使う所もあります。私はフランスで一つのカップを順番に廻していくという経験をしました。衛生上どうなのか？など問題ではない、受け入れなさいと言うのです。また、教会によっていろいろなプログラムがあります。「使徒信条」を読む、「主の祈り」があったりと、何か問題でしょうか？「使徒信条」は我々の信仰告白です。「主の祈り」によって私たちは祈りがどういうものかを教えられます。それをしているかしていないかを私たちはさばき合うことではありません。なぜなら、これは「聖書がしてはいけないこと」とは教えていないからです。違ったことがあったとしても我々は受け入れることができるし、受け入れるべきなのです。

(2) **協調できないもの**：聖書がダメだと明確に教えていることに関しては強調できません。

罪＝典型的なものは「罪」です。罪を犯している人たちに対して「かまわない、クリスチャンだから受け入れましょう」とはならないと聖書は教えます。例えば、コリントの教会の問題に関してパウロは、コリント人への手紙第5章でこのように教えています。5：9－13「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。：10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。：11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。：12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。：13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」。だから、「受け入れなさい」という教えもあるし「除きなさい」という教えもあるのです。なぜ、除くのですか？その人たちが罪を犯しているからです。

ですから、私たちがクリスチャンと出会う時に、いろんな教派の人がいます。教理が違っていたりします。でも、彼らが本当に心からイエス・キリストを信じているなら、私たちは交わることができます。もし、彼らが罪の中を歩んでいなければ、例えば、いろんな教理的な違いがあったとしても、少なくとも、私たちは教会としていっしょに働きができなくても、信仰者として、兄弟姉妹として彼らを受け入れることができます。私の友人にも教派が違う人たちがいます。いろんな教えを信じている人たちがいます。しかし、彼らと交わるのは、彼らは間違いなくイエス・キリストを信じている兄弟姉妹たちだからです。パウロが言っていることは、私たちが気を付けなければいけないことは、私たちと全く同じではないからと言ってそのような人々をさばいてしまうことです。

偽りの教え＝パウロはⅡテサロニケ3：14－15でこのように言っています。「もし、この手紙に書いた私たちの指示に従わない者があれば、そのような人には、特に注意を払い、交際しないようにしなさい。彼が恥じ入るようになるためです。：15 しかし、その人を敵とはみなさず、兄弟として戒めなさい。」と、非常に大切なことです。イエス・キリストを信じてこの救いに与っている者たちが、先ほどから見てるように「すべての点で教えが同じでない。やっていることが同じでない。考え方が違う。」と、そのようなことで彼らをさばいてしまって、あたかも彼らが異端であるかのように私たちが扱うなら、私たちは主のみこころに反しているということです。みことばはそのようには教えていません。彼らが主イエス・キ

リストを信じる者たちであるなら、私たちは彼らを愛することができるし、彼らに対して我々は尊敬を払うことができます。もちろん、教会としていっしょに働けないこともあるでしょう。しかし、少なくとも、信仰者として私たちは交わりを持つことができます。「その人を敵とはみなさず、兄弟として戒めなさい。」と。

3) 「受け入れる」ことに関する主イエスの例 8-9 a 節

ローマ 15 : 8-9を見ると、今パウロが私たちに教えている「互いに受け入れ合っていく」ということの例が記されています。その例は主イエス・キリストご自身がなされたみわざです。「:8 私は言います。キリストは、神の真理を現わすために、割礼のある者のしもべとなりました。それは先祖たちに与えられた約束を保証するためであり、:9 また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。」

(1) ユダヤ人の救い

「キリストは、…しもべとなりました。」、だれのしもべですか？「割礼のある者のしもべ」、つまり、ユダヤ人たちのしもべだったと言うのです。何のためですか？「神の真理を現わすため」です。8 節の終わりには「それは先祖たちに与えられた約束を保証するためであり、」とあります。この「保証する」とは「立証する」ということです。つまり、8 節でパウロが教えたことは、主イエス・キリストの誕生を見た時に、私たちは神がどんなお方であるかということを明確に知ることができるということです。

イエス・キリストの誕生、まさにそれは、神がイスラエルの先祖たちに約束された契約の成就でした。アブラハムに与えられた契約、イサクに与えられた契約、ヤコブに与えられた契約がこの救い主によって成就したのです。ですから、パウロはそのような過去の約束と、そして、現実にイエス・キリストがこの世にお生まれになったこと、そして、イエス・キリストが十字架で救いを成し遂げてくださったこと、それを見た時に私たちが覚えるべきことは、私たちの主は確実に約束を守られる真実なお方であるということです。そのことをパウロはこの 8 節で言っているのです。何のために主がこの世に来られたのか、なぜ、ユダヤ人のしもべとして、仕える者としてこの世にお生まれになったのか、すべては神の約束の成就であったのです。これらを通して、神が真実な方、先祖に与えられた約束を立証する方、確実に約束を守られるお方であることを明らかにするのです。このことは私たちにとって大きな希望です。

(2) 異邦人の救い

そして、その後で 9 節にこのように続きます。「また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。」と、救いの流れが見えます。まず、ユダヤ人から始まったのです。神はまずイスラエルに対して働きを始めたのです。そして、その救いが彼らを通して異邦人へと広がって行ったのです。

「また異邦人も、あわれみのゆえに、」とあります。イスラエルとは違ったのです。イスラエルの先祖たちは神からそのような約束をいただきました。そこには契約がありました。異邦人は違ったのです。しかし、異邦人もこの救いに与ったのです。パウロは言います。「すべては神のあわれみだ」と。最初に見たように、私たちが何かしたからではありません。神がお喜びになるような人になったからでもありません。罪に染まり神の前に逆らい、どうしようもない私たちのうちに神が一方的に働いて、そして、このすばらしい救いが与えられたのです。「神さま、私は罪を悔い改めます。私は間違っていました。あなたがあの十字架で身代わりとなって死んでくださり、そして、死後三日目によみがえってくださり、私のために備えてくださったこの救いを私は信じて救いに与りたいです。」と。このような選択に私たちが至ったのもすべて神のなさったみわざであると言うのです。

それゆえに、「異邦人も…神をあがめるようになるためです。」と、彼らも神のあわれみによって救われたゆえに、神を心からあがめるのです。「神さま、私のような者を救ってくださって感謝します。」と神を誉めたたえるのです。そのために神は異邦人にも働いたと言うのです。約束を与えられたイスラエルを神はお救いになった。そして、そのイスラエルを通して異邦人が救いに与った。彼らがみな声を一つにしてなすことは「神をほめ称える」ことです。神の一方的な恵みによって救われたと。だから、私たちは、主がユダヤ人も異邦人もキリストの救いによって一つにくださったこと、神のあわれみによって一つの家族に属する者にくださったことを覚えて、教会にあって私たちは互いに受け入れ合っていくのです。

パウロがこの手紙を記したローマの教会の教会員の殆どが異邦人でした。しかし、そこにはユダヤ人もいました。そこでパウロはこのことを再びここで人々に教える訳です。パウロはここで、教会の一人ひとりが神を喜んで受け入れ、そして、救いに与った者たちが互いに受け入れ合っていくように、キリストのみわざに倣ってそれを実践するようというのを言いました。

B. 主なる神の真実さ 9 b-12 節

二つ目に、今少し触れましたが、9-12 節には「主の真実さ」が記されています。私たちの神は約

束を守られるお方であると、そのことが9－12節に記されています。見て分かるように、この四つのみことばは旧約聖書の引用です。旧約の成就をこの四つのみことばによって立証するのです。

- ・ **9節**「それゆえ、私は異邦人の中で、あなたをほめたたえ、あなたの御名をほめ歌おう。」

⇒詩篇 18 : 49「それゆえ、主よ。私は、国々の中であなたをほめたたえ、あなたの御名を、ほめ歌います。」

Ⅱサムエル 22 : 50「それゆえ、主よ。私は、国々の中であなたをほめたたえ、あなたの御名を、ほめ歌います。」

異邦人の救いを通して神がほめたたえられることに言及されています。旧約で教えていたことが今まさに成就した。旧約で神が言われたことがその通り、異邦人であるあなたたちがこの救いをいただき、神をほめたたえる者になったと言うのです。神はこのようにして約束を守られると言います。

- ・ **10節**「また、こうも言われています。「異邦人よ。主の民とともに喜べ。」

⇒申命記 32 : 43「諸国の民よ。御民のために喜び歌え。主が、ご自分のしもべの血のかたきを討ち、ご自分の仇に復讐をなし、ご自分の民の地の贖いをされるから。」

モーセの歌が終わるのです。そして、異邦人が主への賛美に招かれています。

- ・ **11節**「さらにまた、「すべての異邦人よ。主をほめよ。もろもろの国民よ。主をたたえよ。」

⇒詩篇 117 : 1「すべての国々よ。主をほめたたえよ。すべての民よ。主をほめ歌え。」

主への賛美に異邦人が招かれています。

- ・ **12節**「さらにまた、イザヤがこう言っています。「エッサイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方である。異邦人はこの方に望みをかける。」

⇒イザヤ 11 : 10「その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。」

このみことばは、ダビデの家系に救い主が生まれるということです。異邦人を治める、つまり、異邦人がこの救い主のもとに来るということを言うのです。

ですから、パウロはこうして四つの旧約聖書のみことばを引用することによって、神は約束を確実に守られるお方である。それが私たちの神であり、そして、それを今私たちも実際に目撃している。こうして神が異邦人である私たちを救いへと導いてくださった。私たちの神はこのような約束を守られる生きた真の神であるということをパウロは告げるのです。

C. 祝福の祈り 13節

パウロの祝福の祈りが記されています。13節「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。」と、パウロはこのローマの教会がキリスト者にふさわしく、また、救われた者の集まりにふさわしく一つになることを祈りました。なぜ、そんなことを祈ったのか？それは群れが一つになって行く時に主がお喜びになるからです。その時に主の栄光が現わされるからです。

1. 神の祝福

パウロは神の祝福について語っています。

- ・ **救いにおける唯一の望み：**

13節で神に関してパウロはこのような表現を使っています。「望みの神が」と。望みを所有しておられる神だと言うのです。望みを与えることのできる神だと言うのです。救いに関して全く望みのなかった私たちに、この方は望みを与えてくれるのです。この方は救いを与えてくれるのです。

- ・ **喜び：**

同時に、この地上にあって、この日々の生活を過ごして行くに当たって、この方が私たちに希望を与えてくれます。もう一度、13節のみことばを見てください。「望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、」と、つまり、パウロは私たちが神の恵みによって救われた私たちが、この地上にあって喜びを持って生きることができし、平和を持って生きることができると言うのです。ここで言われている「喜び」とは、私たちがこの世の中から得ることのできるものではありません。どのような喜びなのか？パウロの証を聞いてください。

Ⅱコリント 7 : 4「私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」

パウロは「どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」と言っています。私たちが経験したこともないし、また、恐らくこれからも経験することのない迫害をパウロは経験しました。むちで打たれ、石で打たれ、パウロの証を聞けば難船を経験し、盗賊に出逢い、強盗にも出逢い、いろんな難と言われるもの、災難と言われるものを彼は経験して来ました。しかし、そのパウロが言うことは「どん

な苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」です。今、私たちが見ている喜びとはそのような喜びです。嬉しい時に喜ぶ、喜べる時に喜ぶという、この世の中で多くの人たちが経験しているそのような喜びではありません。喜べない時に喜ぶことができる喜びのことです。苦しみの中にあってもその喜びが内側から溢れて出て来る、その喜びです。また、パウロはこの喜びを自分だけではなくて、あのマケドニヤの教会の人々が共有していたことを証しています。

Ⅱコリント 8：2「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」

マケドニヤの教会にもたらされた神の恵みをパウロは話しているのです。極度の貧しさの中にあっても彼らは喜びに満ちあふれていたのです。ただ自分が喜んでいただけでなく、その喜びが人々のために何かをしようという行動へと移っていったのです。どのような苦しみの中にあっても満ちあふれる喜び、どんな貧しさの中にあってもとめどなく溢れて出て来る喜び、すばらしい行動を生み出していく喜び、そのような喜びのことを言っているのです。パウロはこの13節でその喜びのことを言うのです。パウロは祈るのです。ローマのあなたたちがこの喜びによって満たされるようにと。

・平和・平安：

もう一つのことばを見ましょう。「平和をもって満たし、」とあります。喜びだけでなく平和のことも話します。この「平和」と訳されていることばは新約聖書に92回出て来ます。新約聖書を見た時に、このことばがあるところでは今見ているように「平和」と訳されていたり、また、あるところでは「平安」と訳されています。同じギリシャ語が「平和」、「平安」と訳されているのです。パウロが言っていることは、神が与えてくださる「平安」のことです。どんな時にも心騒がせることなく、また、心騒ぐことなく平安でいられるということです。私たちもみなそのような平安を欲しているはずです。

実際に、そのような平安をもって歩んだ信仰者たちのことが聖書にはたくさん出て来ますが、その中の一つ、ペテロのことを紹介しましょう。使徒の働き12章1-9節に記されていることです。ヘロデ王はクリスチャンであるヤコブを殺しました。それがユダヤ人たちに気に入られたのを見て、今度はペテロを捕えるのです。牢に入れて16名の兵士が番をして、過越の祭りの日の翌日にペテロも殺そうとしていたのです。明日殺されるかもしれないというそのとき、二人の兵士の間で鎖につながれていたペテロは何をしていたのか？みことばによれば彼は眠っていました。彼は状況を飲み込めていなかったのでしょうか？明日、自分の首がはねられるという状況を理解していなかったのでしょうか？いいえ、ちゃんと理解していました。それでも彼は眠っていたのです。しかも、聖書によれば、主の使いが彼のわき腹をたたかなければいけないほど熟睡していたというのです。明日殺されるというのにどうして熟睡などできるのでしょうか？普通なら、いろいろなことを考えて一睡もできなくて当然ではないですか？しかし、ペテロは熟睡していたのです。なぜでしょう？神の平安をもらっていたからです。

2. 私たちの責任：信仰と歩み

パウロがこの15章の中で言っている「喜び」、「平和」というのは、このような「喜び」、このような「平安」のことです。そして、パウロは、このような喜びや平安をだれが与えてくれると言っていますか？みことばによれば、神がそれを与えてくれると言います。「望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、」と、神が与えてくれると言うのです。でも、現実を見た時に「私はそんな喜びを持っていないし、いつも不安だらけだ。」と言いますか？この約束された喜びや平安を得るカギがあるのです。みことばがそのことを私たちに教えてくれます。

1) 信仰

見てください。「あなたがたを信仰による」と記されています。つまり、私たちがこのような喜びを持って平安を持って日々生きて行くために必要なものは「信仰」なのです。神に対する信頼です。だから、パウロはこれまで、神は信頼に価する方だ、神は約束されたことを必ず守るお方だ、そのことを繰り返して教えて来たのです。問題はあなたがそのことを信じて、その神に信頼を置いて日々を生きるかどうかです。神はそれを与えられたのです。でも、私たちがそれを受け取るためにはそれぞれに責任があるのです。この神を信頼して、このような約束を与えてくださるこの望みの神に信頼を置いて私たちが歩むかどうかです。

2) 歩み：ステパノの例

(1) ステパノ：殉教を遂げた

そうです。信頼を置くこと、信頼を置いて歩むことがこのような祝福をいただいて生きるカギなのです。もう一人の信仰の勇者の話をしましょう。ステパノです。使徒の働き6-7章に、このステパノという人物のことが記されています。ステパノは殉教を遂げます。しかし、彼がその殉教を遂げるまで、

死を迎えるまで、彼は神の愛をもって生きました。どういうことか？彼が死を迎えたときのことが7章に記されています。人々がステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んでこのように言ったとあります。神の前に祈っているのです。使徒7：60「そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。」と、自分に石を投げつけている憎しみと怒りに満ちあふれた人々のために祈るのです。「彼らの罪を赦してやってください」と。思い出しませんか？イエスが十字架の上で苦しんでおられた時、最初におっしゃったことは「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ23：34）でした。ステパノも死を迎えた時に彼は神の愛を示したのです。

死を間近にしていたステパノは神の前に正しく歩み続けました。みことばを見たときに、ステパノの口から悪口は出ていません。「なぜ？自分が…」と彼の口から一切悪口が出ていません。ですから、私たちはこのステパノの最後のやり取りをこのようにみことばで読むとき、私たちの心は励まされます。彼は最後の最後まで主に対して従順でした。7：59「主イエスよ。私の霊をお受けください。」と。ある人はこのように言います。「神に忠実であれば、きっと私たちの願いはかなえられる。」と。これは大間違いです。その教えを発したのはサタンです。なぜなら、ステパノはこうして神に忠実に従った、その結果は殉教だったからです。

（2）信仰生活のカギ：聖霊なる神の働き

思い出してください、皆さん。私たちは自分の欲しい物を手に入れるためにイエスを信じたのでもないし、自分の欲しい物を得るためにこの世を生きているのでもありません。神の栄光のために救われた私たちは、神の栄光を現わすために生かされているのです。そして、神の栄光が私たちを通して現わされて行くためには、私たちは神のみこころに従って行くのです。ステパノはそうにして生きたのです。神は彼を通してご自身の栄光を現わされたのです。このステパノの歩みのカギは何だったのでしょうか？もちろん、ステパノだけではありません。先ほど見たように、ペテロもパウロもそうでした。信仰の勇者たち、神のこのすばらしい喜びを持ち平安を持って生きた彼らの信仰生活のそのカギは何だったのか？

パウロはこのように言いました。ローマ15：13に「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。」とあります。その力は神から来る、内住している聖霊なる神がその力を与えてくれると言うのです。だから、このステパノを見た時にあることに気づくのです。ステパノについて使徒の働きは教えます。ルカはこのように言います。使徒の働き6：5「この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、…」、7：55には「しかし、聖霊に満たされていたステパノは、…」とあります。ですから、ステパノは常に聖霊に満たされて生きた信仰の人です。彼の歩みを見た時に、それが具体的な形となっています。6：8には「さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざと行なっていた。」、6：10には「しかし、彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった。」、6：15に「議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように見えた。」と記されています。ステパノは聖霊に満たされて生きたのです。聖霊にすべてを委ねて神とともに生きたのです。

今日のテキストであるローマ人への手紙15章でパウロが言うことは「あなたたちはこの望みの神を信じたのでしょう。あなたの信じた神はあなたに望みを希望を与える神でしょう。」です。聖書のみことばがあなたに希望を与えるというのです。神がこれまでどのように人々を扱って来られたのか、どのようなみわざをなされたのか、聖書のみことばは我々信じる者にすばらしい希望をもたらします。そして、聖霊なる神は私たちのうちに働いて私たちに希望をもたらします。しかし、実践によってこの祝福を私たちは自分のものにするのです。みことばは確かに、神がどんな方であるかを教えてくれます。私たちが喜びや平安を持って生きるために必要な聖霊なる神は私たちに備えられています。しかし、それを実際に自分が経験するためには、神が言われたことを実践する時に始めてそれが自分のものとなるのです。その証拠にステパノはこの宗教家たちにこのようなことを言っています。使徒の働き7章で彼はすごいことを言います。7：51「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。」と非常に厳しいことを言ったステパノは、53節でも「あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」と言います。ステパノが非難したことは「この宗教家たちは聖書のことばを聞いてはいたけれどそれを実践しなかった。ただ聞くだけの者たちだった。」ということです。だから、そこに救いもないし神の祝福もなかったのです。

この中でまだイエス・キリストを信じていない人、あなたはみことばを聞いてはいてもまだ神と和解していないのです。どれ程聞いても、どんなに知識を蓄えてもそれはあなたを救いません。この神の前に罪を悔い改めて、この神が備えられたイエス・キリストによる救いをあなたが心から受け入れるまでできないことです。それを今あなたに望みます。今日あなたがその救いを求めて出て来ることです。

信仰者の皆さん、神の約束というのは今日私たちが見て来たように、このような神しか与えることができない神ご自身の喜びや平安を持って生きることができるということです。それが神の約束なのです。では、もし、それをあなたが経験していないとするなら、神の真実さに問題があるのではなく、あなたに問題があるのです。あなたがそのように歩んでいないからです。神のみことばを聞き、そのみことばに従ってあなたが生きて行くなら、神が約束されたように、あなたはこのような喜びを持って平和を持って歩んで行くことができるのです。神があなたにこれらを満たしてくださるのです。聞くだけの人ののか、聞いたことを実践する人なのか、神のこの祝福がそこにかかっているのです。

パウロは言いました。「群れは一つになるように」と。もし、私たちのこの群れが一つになっていなければ、この世の中にこんなメッセージを発しているのです。「私たちの神はこんな分裂をもたらすような、それを良しとされるような神だ。」と。しかし、私たちがキリストにあって一つとされているならば、一人ひとりがその努力をして、そして、一致が生まれているなら私たちは世に対してこんなメッセージを発するのです。「キリストにあって私たちは一つにされた」と。そこには人種も国籍も身分も全くない、キリストによって一つにされた家族がそこに存在すると。その神のメッセージを私たちは世に伝えて行くのです。そのために一つになりなさいと。イエスが受け入れてくれたように、互いに受け入れ合いなさいと。

実践してください、皆さん。そこに主の祝福があります。その時に主のみわががなされます。まず、それを実践する人として、今日からあなたが歩んで行かれることを心からお勧めします。心から祈ります。

《考えましょう》

1. 「互いに受け入れること」の実践が難しいのはどうしてだと思いますか？
2. 「互いに受け入れること」のために、各自が覚えるべきことは何だと思いますか？
3. 実践のない信仰が、主の前で空しいのはどうしてですか？
4. みことばを実践する人となるためには、どうすればよいのでしょうか？